自然賛歌

桂公園（桜尾城跡）

妹尾　治人

桂公園は、廿日市で最初に出来た公園で、大正二年五月八日に開園している。

公園の入口に建っている「桜尾城跡・桂公園」と「桜尾城跡」と書かれた二つの碑を見ながら、桜並木の坂を登る。

その坂を登り詰めると、右手に桂太郎公爵の手による「桂公園」と大書した碑がある。

桂公園は、第十八代桜尾城主・桂元澄の子孫の桂太郎公爵が、大正二年当時に、廿日市町に寄贈されたもので、桂公園という名称は桂太郎公爵の名に因んで名付けられた。

時経て、桂公園は市民の憩いの場として、歴史を秘めながら今日、その姿がある。

桜尾城跡といっても、老松茂る峻厳な城山の風景は、そこにはなく、昭和四十二年より阿品沖の埋立て等に、城跡の頂上付近は切り崩されてしまい、元の山容は消滅した。昔の桜尾城跡を偲ぶものとしては、妙見社と山隅衛の歌碑があるのみである。

妙見社は、第十六代の桜尾城主・大内義隆が氏神様として、お祀りしたもので、その古い社殿の前に犬槇（イヌマキ）の大木がある。

山隅衛の歌碑には「ふるさとの、町のいらかを見に登る　城あとの山　春蝉のなく」と刻まれている。この碑は、短歌誌「晩鐘」の創立二十周年記念に、昭和十五年に建てられたもので、未だ元の山容の残る城跡からの情景が、見事に表現されている。

昔の桜尾城の切り崩された今の姿は、小高い丘の風情で、頂上は平坦な広場（一万六千五〇〇㎡）となっている。

公園広場の大部分はグラウンドで、今では、主にゲートボールの競技場に使用されている。

公園の入口付近や公園周囲には、桜尾城に因んで桜の木が多く植えられている。

足もとの草花をよく観察すると、次の草花を見ることができる。

①白茅（チガヤ）
②蓬（ヨモギ）
③雀の帷子（スズメノカタビラ）
④繁縷（ハコベ）
⑤菘（スズナ）・・・「かぶら」ともいう
⑥小鬼田平子（コオニタビラコ）
⑦野紺菊（ノコンギク）
⑧笹（ササ）
⑨栴檀草（センダングサ）
⑩姫昔蓬（ヒメムカシヨモギ）
⑪刈萱（カルカヤ）
⑫葛（クズ）
⑬葉蘭（ハラン）
⑭藪蘭（ヤブラン）
⑮石蕗（ツワブキ）

以上が観察された。

なお、この観察したのが冬日なので、夏日の探索であったなら、さらに夏の草が見られると思われる。しかし、この公園には不思議と、比較的に外来の帰化植物は少ない。公園の樹木は桜（染井吉野）がほとんどであるが、桜以外の樹木で、印象的な樹木は、枝分かれする多行松（タギョウショウ）である。また、何故だか株立て状になっている粗樫（アラカシ）、妙見社前には犬槇（イヌマキ）があり、木には赤と青のツートンカラーの面白い実が付いていた。

桂公園は、春には花見の宴、四季を通してゲートボールに草野球、子供達には、複合遊具などがあって、年中、入園者が絶えない。

西暦一、二二〇年に藤原親実が入城以来、毛利秀元までの、二十代の城主の移り替った三百八十年。実に桂公園は歴史ある桜尾城跡である。

皆んなで、桜尾城に因んだ石碑や歌碑を建立したり、万葉の植物など日本古来の草花を植えて、城下町廿日市の歴史公園としての、桂公園の再生を心から叫びたい。

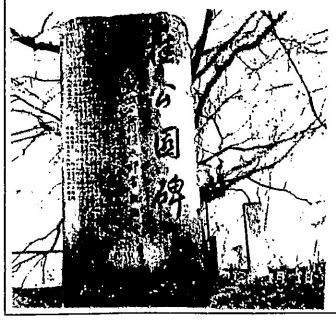
廿日市の歴史公園「桜尾城跡」として生まれ変われば、もっと多くの人々が訪れようというもの。そうなれば、また廿日市の観光名所として、脚光を浴びる日が訪れようものを。

と桂公園の昔を偲びながら、冬日の一日を散策した。

城跡の　栄枯を偲ぶ　枯れ白茅（チガヤ）

【自然観察指導員】

急報

桂太郎碑　最適地へ移設計画決定

■三月五日、都市整備課および郷文研の立会いの下、豊田貞夫市議仲介により、桂太郎公爵の筆になる「桂公園」碑の移設が決定、現在地より北へ約二〇m移動し、碑面は宮島に対す。工事は、三月中に完成予定。